

地球を 読む

古の中国に、風声鶴唳という言葉がある。おじけつした軍隊が、風の音や鶴の鳴き声に驚き騒いで敗走することだ。今年8月、米軍撤退の決定後に起きたアフガニスタン国軍の壊滅は、世界史でも有数の風声鶴唳と言えるだろう。

首都カブールに迫ったイスラム主義勢力タリバンの前に、ガニ大統領が国外に遁走してしまった。



山内 昌之 武蔵野大学特任教授

アフガニスタン

秩序失った地政学的要衝

2001年からの20年間、米国はアフガンで800億の戦費を支出し、同国軍の訓練には850億を費やしてきた。しかし、肝心のアフガン兵たちは、自分たちの守る国家・国民の意味を認識していたとは

国民を見捨てた「アフガニスタン・イスラム共和国」とは何だったのだろうか。イスラム共和国を名乗ってはいても、国家機構が確立している隣のイランやパキスタンとは違い、瞬時に消滅した。軍本体の腐敗に消滅した。軍本体の腐敗

地球を 読む

1面の続き

山内昌之氏 1947年、札幌生まれ。ハーバード大客員研究員、東大中東地域研究センター長を歴任。東大名誉教授。神田外語大客員教授。

アフガニスタンほど地政学上、複雑性と不安定性に脅かされてきた地域も少ない。古代のアレクサンドロス大王からムガル帝国を創ったバーブルに至るまで、東西と南北から、異なる政治力学がこの壮大な四辺形にいつも働いてきた。

19世紀以降になると、中央アジアとインド亜大陸をめぐって、大英帝国とロシア帝国は「グレート・ゲーム(大勝負)」を繰り返した。その焦点はまさにアフガンで、英露はじかに接触しないように、アフガンを両者間の緩衝国とした。他方、厄介なのは、一般のアフガン国民にタリバン

安定回復 日本も関係を

に誰かに支配されたことがないという。他から孤立しながら平和をいつも享受してきたのだ。過去20年をみると、都市住民でもタリバンの支持者は1割程度だったとされる。タリバン復活劇にアフガン人が熱狂しないのは当然なのだ。そのタリバンは厳格なイスラム主義に基づく社会統制を復活させ、国際社会の

英文は金曜日(7日)のジャパン・ニュースに掲載予定です